

# モグラの兵隊 (第1部)

カナタ・ムメイ



はじめに

この小説は、論理を無視した場面転換で夢を描いております。全体を貫く筋はございますが、場面が変わることに違和感のある方は、夢の場面が変わった、とご判断ください。また、この作品は、映画「インセプション」の公開前、映画の情報を得る前に完成したもので、一部偶然の一致をみた夢の階層構造の考えは盗用でないことをお断りしておきます。また作品自体はオリジナルで、全く映画「インセプション」とは異なります。

著者

「ツカマエロ！」治安取締局の男が流行おくれのライダースジャケット、エンジニアブーツの格好で、走っている。小作りの顔だちは少し頼りなげだ。前方には、懸命に走り、汗をかいた乞食風の男が追われている。ごみ箱を蹴飛ばし、自転車を倒して、逃げている。汗は脂と体臭を吸って、嫌な臭いをさせている。髪は固まり、垢にまみれている。逃亡の極意はないが、ただ捕まらない逃げ方は乞食になることだった。乞食であれば、市民は顔を覚えてなんかいない。ただ、取締局の人間は鼻がきく。治安取締局の男は4人で、局員2人が男を追っている。もう2人は先回りをしている。男の先にある小学校の裏門脇から仲間が出てきて、男をなぎ倒す。そして連れて行く。それだけだ。いわないことはない。局員が乞食の胸座を掴んで脚払いをした。乞食は倒れ、立たせようとする。乞食が懷から取り出した帽子をかぶった。黄色い野球帽のようなものだった。すると、乞食は地面に向って飛び込んだ。地面が確かに水のような波紋を浮かばせると、乞食は消えた。脳信号を使って、本部に連絡をした。帽子だとは気づかなかった。

夕方近くになって、当局の一室にいる別の乞食は薄汚れた帽子を取り出し、被った。そして、監禁されていた床に飛び込んだ。一階にたどり着くまで4回くらい飛び込み、そして地面深くに姿を消した。

カワサキとスバルの浮上バイクがリニアビル群の上空を飛んでいくと、そこには鋭い刃のような飛行機雲が流れ残った。陽射しは強烈で、ジャンクの爪の先には黒い垢がつまり、安タバコで焼けた肺からは何ともいえないガスがこみあげ、二日もろくに物を食べていないため、喉は渇きですっかり干上がっていた。その飛行機雲を彼は手で庇をつくって、しばらく見つめていた。ジャンクは今年で30になる。生まれながらの物乞いと売春で生き長らえてきた。かれは自分の尻に興味をもつ奴らがいないと知ると、すっかり食べていけなくなり、喫煙バーの吸殻を集めてはタバコを確保し、同じ乞食仲間でもまだ体を求めるものから傷んだミルクパンと引き換えに体を投げ出した。すっかり身を落とした彼は臓器や手足を売り払うか、博愛協会の手先になるか、迷いながらここ数ヶ月過ごした。ポケットからすっかり擦り切れた博愛協会代表の小林の写真を見つめた。小林は女にスパンキングを行うのを性癖としていて、市場に出回るディスクには顔こそデジタル処理された小林らしき人物が女を殴り殺す場面が映っている。そのディスクは販売禁止の動きを見せはしたが、人形と判断され、流通しつづけている。あれは本物の女を使っていると、人々は口々に言う。

小林は昨夜殴り殺した女の処理を側近に命令すると、風呂に入った。

ジャンクが水のような便に血が混じり、医者に行くため村長の家を訪問しようと考えていた。金を借りて、民間の医療機関を受診するか、潜りの医者を探すか迷っていたが、村長に相談をしてみることにした。村長の家に行くには、日露側溝と名前のついた川から舟に乗る必要があった。

「おい、運賃を支払え」舟漕ぎ人が横柄に言った。

「金がないんだ」

「名前は」

名前を言うと、舟漕ぎ人が棧橋から繋がる石段を上がっていった。石段の上には煙管を吹かす老人が座っており、舟漕ぎ人が伝えている。老人は聞き終わると、煙を遠くに糸のようにして吹き、ゆっくり降りてきた。その後を舟漕ぎ人がついてきた。



「やあ、ジャンク。お前の親父をよく知っている。どこに行くんだね？」

「村長に会うのです」

「何の用件で？」

「医者を紹介してもらうためです」

「どこか具合が悪いのか」

この老人は老人の顔というものをしたままで、表情は固定し、マスクを被っているかのようだった。

「医者はやめとけ、妖術師のほうがいい」

「科学しか信用しません」

「駄々をこねるな、年が勝手に増えたわけではない、占い師か妖術師にしておけ、悪いことは言わない」

そのとき老人の口調も感情が固定したままの声でしかなかった。やさしい物言いだった。老人は舟漕ぎ人に乗せるよう伝え、再び腰を庇うようにして、石段の上に行き、再び腰を降ろした。頭を左右に動かしていた。

舟は静かに上流をめざした。舟に付けている風鈴が風に揺られチロチロと鳴り響く。リニアバスが通る電車通りの下を潜り抜けると、栈橋が見えた。そこには頭頂部にパンのような小さい帽子を乗せ、夏だというのに黒いトレンチコートの男が立っていた。舟が栈橋についた。その男が乗り込んできた。舟漕ぎ人が疑り深い目をした。

「旦那、近頃ニセ金が多いんですよ、ちょっと調べてもいいですか？」舟漕ぎ人は男から受け取った金貨をスキャンし、画像を警察に送った。同時に着信した。

「旦那、一回降りてくれませんかね」

「金がどうかしたのか？」

「ニセ金みたいでして」

「そうか、ということは連中は来るね」

「ええ、そのようで…」

空中警察の女が三人、水蒸気を噴出する浮上ジャケットを着て上空に現れた。すると、男はトレンチコートを広げ、上空に一気に飛び立った。空中警察が「止まりなさい！」と脳信号を一斉に送った。銃で上昇していく男に照準を合わせるが、男は乱雑に旋回した。追尾手錠を投げつけた。それは男のコートに絡んだ。男がコートをナイフで切ると、その後上空に消え去った。空中警察は脳信号で応援を要請した。

「舟漕ぎ、時間だよ」舟から声がかかった。

舟漕ぎ人は額の汗を拭うと舟を動かした。

村役場にジャンクが着いたときには日は暮れていて、舟漕ぎ人は、もう舟は来ないから、泊めてもらうんだね、と言った。

役場の裏に大きな家があって、そこが村長の家だった。ブザーを鳴らすと、ショートカットの若い女が[世界平和]とプリントされた、よれよれの大きなティーシャツを着てドアを開け、出てきた。

「どうしました？」

「医者を紹介してもらいたいのです」

女は村長を大きな声で呼んだ。村長が奥から出てきた。

「沖縄から来ていた婆さんに頼むか…そうだ、昨年死んだんだ。えーっと、占い師ならねえ、…もうだんだん数が減って、インチキが多くなってね、なにせこの技術進歩でしょ、ねえ…えーっと、…近所にいるノンノン様をお願いしよう、占い師なんだけど、あんたの具合を見てくれるよ、おーい、ヨウ…、いや、彼女が案内する」そういうと追い出されてしまった。

「ご案内します」といって、ジャンクは先ほどの世界平和のティーシャツの女に付いていった。

「夏でいっぱい汗をかくでしょ、するとお水を飲むじゃない？ちょっと、ごめんなさいね、茂みに入るわ」

「ええ、構いません、ここで待っています」

女の小便の音だけが辺りに響いた。

「来てもいいのよ」と茂みから声がした。

「え？」

「いらっしゃいよ」

「あの、下血しているんですよ」

「そうなんだ」女がジーンズを上げて茂みから出てきた。「もう少しで着くわよ」

門前町のようなところに出た。明かりの少ない淋しいところだった。雷鳴のような音がした。空軍の飛行機だ。

「今ごろ飛行機ですか」とジャンクは言った。

「ええ、この辺はよく通るの、いまどきジェットエンジンなの、うるさいわ、村長ってスケベだから『怖いよ』といって抱きつくのよ」

女がじっとジャンクを覗き込むようにして見つめた。

「あなた独り者ね」

「ええ」

「いや、そうじゃなくて、孤児だったのね」

「あ、そうですよ」

「私もそうなの」

「ノンノンさーん、信者さんをつれてきたのよー！開けてー！」

「信者じゃない」

「いいから、耳が遠いの」といって、女が引き戸を乱暴に叩く。

「壊れるじゃないか！やめてよ、もう！」

引き戸が開いて、寝巻きを着た80くらいの老女が補聴器を調整しながら立っていた。

「信者！信者！信者！」

「うるさいのよ！あんたは！」とノンノン様は怒りながらガマグチから銀貨を渡した。

「ありがと、じゃーね」といって、女が帰っていった。

「あがんなさい」ジャンクはノンノン様からいわれると、中に入った。

「今日は遅いから、泊っていきなさい」

「悪いんですが、下着がすごく汚れていて、…」

「そうか、そうだったね、風呂に入りなさい、夏でもこの辺りは草木が多いからけっこう冷える」

風呂に入っていると、

「ここに下着を入れなさい」とノンノン様は言って、白い麻袋を置いた。ジャンクが風呂から出ると、その麻袋には大きく丸にかこまれた「念」という印が書いてあった。別室で鐘が鳴り、読経が始まった。ジャンクはそのまま布団に入って、眠った。

次の朝ジャンクはノンノン様の自宅を出て、改めて家を見た。上空を浮上ジャケットを着た人が通過した。朝日は眩しく2階に赤い柄のついた厚手の冬布団が数多く干してあり、日光が布団でさえぎられ、ジャンクの顔に陰をつくった。1階の軒下には紙でできたショッキングピンクの自転車が置いてあった。乗れるのだろうかと触れてみると、案外頑丈なつくりであった。

朝食は麦飯とタクアンと青菜のおすましだった。ノンノン様が、

「ここでしばらく静養するといいでしょう」かしこまって座り麦飯を口の運ぶジャンクにいった。「こうしていろいろな人に接するだろ、すると“もらっちゃうん”だよ、だからそれと引きかえに体がぼろぼろになる。これも運命だと諦めている。それに近頃はツンゴにもなってしまった。これは年のせいだろうね」ジャンクはまだ下血が続いていることを大声で言った。

「いままでやってきたことのせいだよ、あまり体を粗末にしちゃいけない」ジャンクは自分が食べるために体を売っていたことだと気がついた。さらに、ノンノン様は

「食べるためには労働することだ、ここから遠くないところでアルバイトを募集しているよ」

「将来はどうなるんでしょうか」

「そうやって手相を見ても役には立たないよ、何事も予兆というものがある、今日はなんだか気が引けると思って出かけると事故になったとか、これを渡しておきましょう」とノンノン様はいい、お香の匂いがする黄色い帽子を手渡した。「なに？という顔しているわね、これを被ると、地面に飛び込めるんだよ、脱出できる、このさきとても頭のおかしい男があなたの前に現れる、用心することだ。」

「誰ですか？」

「小林、そう、あの博愛協会の小林だよ、協会に入ることを一時期考えたね、だめだよ、あれはジョーカーだ、奴は頭がいかれている、人を殺しもしている、あなたのところに近寄る小林の象が見えたんだよ、とても優しい顔をしているが、私が見つめると、顔が溶け出して、そして腐った。死臭が強かった。たぶん殺された人びとの怨念だろう。博愛協会なんて嘘だよ。」

「両親はどこにいますか？」

「お父様は死んでいる。冥土にいるよ。この世界にはいない。お母様はいきていらっしゃるが、たぶんこの先会えないだろう。一人ぼっちとはいえ、仲間が近く現れるよ。もう古い殻を捨て去る時期だよジャンク。この帽子をけして乱用しないように。」

しばらくすると、ジャンクの下血が治まった。ノンノン様の祈祷と食事のおかげだと考えた。

「さあ、ジャンク、わたしは体を休めないといけない、いろいろな人が来るから力を奪われてしまうんだ。私は少し静養しなくてはならない。」そう言って、ノンノン様は布団を被った。

ジャンクはノンノン様の家を出て、船に乗り込んで、町に出たところ、市場に入る入口の前に人が大勢行列を作っていた。ジャンクは炊き出しではないかと、列に並ばずに、様子を見るため、先頭に行ってみた。すると、手荷物検査をしている治安当局が人びとの列の原因だと分かった。治安当局の局員による検査は、かなり粗かった。バッグをひっくり返し、黄色い帽子を探して、無いと分かれば、そのトレーを左に寄せ、持ち主が自らバッグに中身に戻していた。検査台の上にバッグを乗せると、優しいひくい声で、「こんにちは。奥さま。申し訳ないですね」と声をかけるのが小林だった。後ろに手を回し、鳩が歩くように円を描いて歩いていた。行列の中には熱心な信者がいるらしく、「お声を聞かせてくださいますと、感無量です」と拝む者もいた。ジャンクは、行列からはみ出しているため、局員が身元を調べたいと言って、両脇に手を入れられ、つるされるようにして、護送車に放り込まれた。

護送車の中は、オレンジ色のランプが頼りなく光り、周りは黒いカーテンで覆われているのかと思ったら、窓自体がなく、間隔を置いて縦に明り取りというべきか空気孔というべきか、切れ込みが入っていた。異臭がひどく、皆がどうも宿無しらしく、浮浪者を一斉に集めているらしい。ジャンクは、隣に座っている男に声をかけた。「これからどこへ行くんだろうか」「知らん、ただ噂じゃ、殺されるらしい、問答無用で」外で、ドイツ語のような感じに「シュタッツ」と叫ぶと、護送車のドアが曲がるほどの感じで引かれた。長いこと揺られていたら、異臭と空腹で吐きそうになった。左右に大きく揺れるところを見ると、町を出たのだな、とジャンクは想像した。ブレーキが軋んで止まった。すると、護送車から一人ずつ下ろされ、手錠と腰縄が施された。どこかのあばら家だろうか、倉庫だろうか、厩舎のようにもみえる建物の一階に全員が運ばれ、長い列を作った、丸椅子の上に皆は腰かけた。一人が上の階で呼ばれると、口の中にマウスピースを入れられ、引きづられて真鍮でできたノブ、厚い木の板でできたドアから一室の中に入った。もう一人は、ちょうど入口の前に待機をしていたが、泣き叫ぶ声が室内から漏れてくる。それとともにコンプレッサーの音も聞こえてくる。「次、次、ストップ」合計三名が室内に入った。室内には、処刑台が一つ大きなランプの下に置かれており、頭を剃りあげ、入れ墨を施した男が処刑台に浮浪者を座らせ、首を腕を回して押さえていると、同じ顔をした男が皮ベルトで固定をした。コンプレッサーは餌に飢えた獣のような声に聞こえる。浮浪者の両こめかみに、鈍く光る黒ずんだ銀色をした万力のような装置がかぶせられ、処刑台の下からは、銀色の蛇腹のケーブルが伸び、黄色い名刺入れほどのコントローラに白いボタンがついていて、それを押す前に固定具の具合を調べるように怒鳴っていた。「大丈夫です」と頭に入れ墨を入れた男が言った。すると、ボタンを押した。コンコンコンとコンプレッサーが圧を増す回転を続け、次に低い空気の破裂音がすると、浮浪者の両こめかみに金属の槌がめり込んで、白目を出し死亡した。頭蓋骨破壊装置だった。残りの二人に顔から血の気が失せた。

やがてジャンクの番になると、手錠と腰縄が外された瞬間は、あの装置が自分の前で空になった後だと考え、次に男どもがジャンクを捕まえ、手錠と腰縄を外しにかかった時、ジャンクは、両膝を曲げたまま飛び上がると、両方の男の顎に音を立ててあたり、男たちはのけぞって、倒れこんだ、ジャンクは懷から黄色の帽子を素早く取り出すと、それを被り、地面に飛び込んだ。

1階に出て、もう一度飛び込むとあとは口を大きく開けたり閉めたりして顎の痛みを消そうとする男のもと、ボタンを操作していた小林だけになった。

私がシンくんと出会ったのは危ない町でのことだった。私はハローワークでさんざん待たされて、イライラしていたため、紹介状をもらい、自販機で「氷結」を買って、飲み干して、ポケットを探ると小銭しかなかった。電車賃くらいにしかない。また母から借金をしなくてはならない。

職安通りを歩いていると、人が倒れていた。髪を短く刈り込んだ男で、血だらけになっていた。声をかけた。返答があるため、死んでいないことが分かった。

「警察に知らせようか」

「ダメです、ママが怒ります」

「でも、そのケガ、酷いよ、とりあえず病院に連れて行こうか」

「病院もダメです」

話していると、私の自宅に連れて行くことになった。信現と言う名前で、寺の後継ぎというより住職であることが分かった。なぜシンくんを運ぶことになったかといえば、金を持っていたからであった。

自宅に着くと、私の母が出てきて、血だらけのシンくんを見て、誰なのか尋ねた。母はなぜ病院に行かないかと言うことも聞いたが、シンくんはママに怒られると言うだけであった。

傷は恐らく4針は縫わなくてはならない切り傷で、あとは顔が腫れるような内出血があった。母は切り傷を見て、

「ここは縫わないといけないわ」と言う、

「ママがひどく怒るんです」と言った。

「ママに怒られるもなにも、…しょうがない、おばさんが縫うわ」

シンくんが、そうしてください、と言うので母は、消毒エタノールをかけ、傷口を縫うことにした。私の母は以前洋裁に凝って雑誌をよく読んでいた。

「いたっ」

「母さん、そりゃ無理だよ、それって縫い針でしょ、外科が使うのは釣り針みたいなものでしょ」と私は言った。

「昔テレビでラグビー選手がケガをしたとき、こうして縫っていたのを見たことがある」と母は言った。

「いたっ」またシンくんが顔を歪めた。

「うるっさいわね、病院に行けばいいのに、断るからよ」

4針ですむところを7針くらい縫った。

氷を入れたジップロックで顔を冷やすと、シンくんは小便に起きるとき以外は眠っていた。母が

「動物はああやって自分でちゃんと治すのよ。それより、仕事はどうなったの？」

「ああ、紹介状はもらったんだ。まず望み薄だね」

三日後、シンくんはどうか布団の上で起きていることができた。今日は面接日だ。私はシンくんと話をした。シンくんが次のような話をし出した。



シンくんのママは教育熱心で、シンくんはあまり勉強が得意ではなかった。

シンくんのママへの依存は大人になっても直らなかったし、大学受験のときにママは鬼のようになってシンくんを叩き上げ、合格させたが、シンくんは変調をきたし、薬物療法と精神科のカウンセリングで、現在なんとか住職として生活している。

親として嫁が来ないとなると、あととりがいなくなり、寺を明渡すことになると思ったママは、お見合いをさせた。ところが、お見合い当日にシン君はもじもじしていると、ママが話し始めて、ちょっとした拍子に子供のことを話し出した。

ママの言うには、子供は必ず男の子で、シンくんのような性格で、寺のあととりとなってもらう。それから大学に行かないとだめ、それには、初夜にマジナイをかけるから、私は側にいます、こういうのもシンも年をとると精子の数は少なくなり、それだけ繁殖能力が落ちるためです、と言い、相手の父親は怒り出した。

お見合いが駄目になって、友人からノーマン・ベイツみたいだ、といわれ、やけを起こしたシン君は、友人から止めておけといわれたのに、街頭で女を 5000 円で買って、ママに連れられ、泌尿器科に行った。すると、単なる尿道炎で、性病ではないことが分かり、ママはすごく安心して、すごく怒った。ところが、この出来事で、相手の女が、怖い人とつながりがあったため、シンくんをゆすろうと考えたらしく、怖い人が寺に来ることになった。ママは少しも動揺はしなかったものの、シンくんはベルの音、電話の音、車の音を聞くとびくびくして、薬の分量が多くなったが、それでも現実を起こっているわけで、治らず、シンくんはあるとき家出をした。2, 3 年ほどして、寺に戻ったシンくんは、見違えるほど精神的にも進歩した姿だったが、あるときママが、あなたは一度ママを捨てたのね、と、ことあるごとに言われ、再びなよなよした元のシンくんになってしまった。ママには逆らえないよ、と、こぼすことが多くなった。

ママがそこまでシンくんを縛り付けるのは、ママの夫で、前の住職であったシンくんのパパが樹海で心中をしたためであった。相手が檀家であったために、ママはこっぴどく攻め立てられて、いまの寺に移ったときに、5 歳のシンくんを間違いがないよう管理しだしたのであった。シンくんには罪がない、とんだとばっちりを受けたのだ。住職としてシンくんがボランティア活動をするときでも、ママは女の人に根回しをして、シンを誘惑したら、ただじゃおかないわよ、と脅かし、そうこうしているうちに、シンくんの所作が女ようになっていったため、オカマが寺にいる、オカマが寺にいる、という悪口が流れだし、シンくんはますます悩んだ。やけを起こしたシンくんは再び危ない町へ向って、けがをしたところを私と会ったのだという。話し終えたシンくんが、眠ると言うので、面接に向った。

面接場所は新宿で、30 分前に着いたため、バッグから i-pod を取り出し、聞いていた。すると、一人の男が近づいてきて、

「そんなイヤフォンをしていて、聞こえるんですか」と尋ねた。

「時間を見ているんですよ」

「あの、ここから徒歩で品川に行くにはどうしたらいいですか」と訊いてきた。

どう考えたって新宿からは遠すぎるので、

「電車で行ったほうがいいです、徒歩じゃ無理ですよ」と答えた。

「お金がないんですよ、それより、ぼく日本人じゃないんですよ」

「言葉たいへんでしょ」

「三ヶ国語話します、中国語、英語、フランス語です」

「すごいですね」

「や、や、や」盛んに「や」と繰り返した。

こういう人を私は嫌うし、薬物でもやってそうな目つきなので面接時間なので行かなくては、とガードレールから道路に出ると、自動車に跳ね飛ばされた。私は頭をフロントガラスにぶつけて意識を失った。

意識が戻ると、母が傍らで本を読んでいた。

「何の本を読んでるの」

「赤い鬼」

「知らないよ」

「部屋に赤い金魚を見る男の話し。誰も信じてくれないの。」

「誰が書いたの」

「同級生、それより眠りなさいな」

「今、何時」

「3時よ、昼の」

「こつこつ音しない？」

「近くで工事してんのよ」

長く深い眠りが訪れ、私は夢の世界の入口に吸い込まれた。

私は紺碧の空の下に一面広がる赤い砂漠にいた。しばらく砂に足を奪われつつも歩いていくと、レールが見え、そこに古い都電がやってきた。都電に乗り込み、市場の雑踏の中を都電はゆっくり進んだ。人々は都電を迷惑そうによけ、走る都電から私は降りた。アナウンスで、この都電は事故になると伝えられたからだ。市場には赤い、青い、黄色い、薄いグリーンの魚が並べてあり、その店では見たことのない文字で書かれた紙がぶら下がっていた。恰幅のいい女が主人であった。見慣れない形のジャガイモ、トマトも売っていた。市場を歩いていると、オイルで汚れた垂れ幕の細い路地があり、覗いてみた。通信機があり、男がアラビア語で通信している。その垂れ幕が揺れ、その路地から女が出てきた。

「ちょっと来て」そう女が言った。

私は女とともに市場を歩いた。大きなスチール製のごみバケツを子供が抱えて横切った。

「こっちょ」と女が言い、再び路地裏に入った。その路地にはアラビア語で書かれた古新聞が液体に濡れて敷き詰められていた。新聞を踏む音を立てながら路地を抜けると、

「さっきの人はスパイなのよ」と女が言った。

「ここはアラビアですか？」

「違うわ、アフリカよ」

どう見ても私の家の近所であった。石垣の上には白い網がムベに絡まれ、アケビのような実をつけていて、その外壁の中は上に向かって、三段に作られている庭である。小さいころこの庭によく入っておじいさんに怒られた。その最上段は日の光で薄ぼんやり輝く白い母屋になっていて、光を取り入れるサンルームが見える。ぼんやりしているのは庭で焚き火をしているためだ。その焚き火の煙のせいで庭に植えた樹木の上に鳩が巢を拵えているのだが、鳩はもう耐え切れず、飛び立っていた。ここが彼女は「アフリカ」だと言うのだ。

「わたし、モグラの兵隊なの」女は言った。

「なに？モグラの兵隊って？」

「ああ、あのね、これ持っているはずよ」と女は言って、懐から黄色いキャップを出した。

「これね、被ると地面に潜れるのよ、持っているはず。」

ポケットから出すと寺から来た手紙で法話の案内だった。女が見せて、というので渡すと、

「これ、シンゲンって読むのかな？」

「あ、そうだよ、シンゲン、頼りないお坊さんだよ」

私はさらに女に引きつられて、団地に入った。子供の背丈くらいの大人が5、6人車座になって花札をやっていた。

「一言も声をかけないで」女が注意した。

エレベーターに乗って、降りると、公園があり、その隣に2階建ての消防小屋が見えた。誰も住んでおらず、赤い三輪車がガラス戸の内側に見えた。

「この建物誰も住んでいないのよ」と言って鍵をあけている。狭い階段を上がると、畳の部屋になっていた。埃っぽい臭いがした。昼の暖かな陽射しが窓から部屋を照らし、開け放たれた便所の白い便器が影を作って目に入った。

「ちょっと来て」というので付いていくと風呂場に案内した。青い小さなタイルの風呂場で、ここも部屋と同じく陽射しで鈍く光っていた。時間が止まったかのようにだった。女は風呂場の水道から洗面器に水を張った。

「さっきの手紙くれる？」女に手渡すと、洗い場の排水溝に詰めた。

「詰っちゃうよ」

「大丈夫、溶けるから」と言って、洗面器の水を流した。手紙は渦を巻いて流されていった。

「さてと、今度はトイレに来て」

女がトイレのレバーを動かすと水が乾いた便器に流れた。タンクの裏を手探りで女が探っている。

「あった…」黄色いキャップを引きずり出し、私の頭にかぶせた。

「いま、潜っちゃダメよ」

女が畳に寝っころがって、足先でテレビのスイッチを入れた。使われていないブラウン管に電気が流れる音がして、映像が浮かんた。とても背の低いジェームス・ブラウンがバイクのゴリラに跨り、走り去る、ジーンズの宣伝であった。

「これからワイドショーを見るけど、いいかしら？」

「かまわないよ」

しばらく見ていると、博愛協会の宣伝が始まった。内容は貧困問題に対して博愛協会は援助をしているということと、特別施設での教育に力を入れているということが長閑な音楽と自然風景を映し訴えている。

最後に小林を囲む多くの子供たちが「ありがとう」と叫ぶと、小林が一人だけ芝生の上に立ち、「皆様に真心込めて博愛協会はお安心をお約束いたします」と言って終わった。

「なんだこれ？」と私が言うと女は退屈そうに

「小林。ペテンとキリストが混じった変な奴」

「何している人なの？」

「力があるっていうだけ、金を持っているんだって」女がうんざりして言った。

押入れから音がする。誰かが入っているようだった。私が立ち上がって、押入れをあけると、シンくんが汗をかいて正座をしていた。

「シンくん、何してんのこんなところで？」

「知らないよ」

女が立ち上がって、シンくんを仰向けにして、上に体を乗せた。シンくんは抵抗したが、女はシンくんの両手を抑え込んだ。

「あなた焼いてるの？」と女が私に言った。

「べつに」

シンくんはお経を唱えた。死体と性交しているみたいだった。

シンくんは素早く動いて、暗い部屋の隅で膝を抱えて座っている、そんなシンくんを女は笑って、私に振り向いた。

「わたしのこと好きかしら、あのね、シンくんをダシにカマかけてみたのよ」

それから女と私はぎこちない付き合いを始めた。

「この黄色い帽子を持っていると、モグラの兵隊なのかい？で、モグラの兵隊って何をするの」

「追っかけまわされるのよ、食事しに、植物園に行かない？」女が誘った。そして部屋の隅で沈んでいるシンくんに女は黄色い帽子を投げつけた。女は、シンくんに向って

「あんたも兵隊の一員にしとくわ、役に立ちそうもないけど」と捨て台詞を言った。

植物園の中に東南アジアのある国があった。軍事政権の支配下にある国だった。私はそこで兵隊の行進にもまれながら、一軒のレストランに入った。主人は色黒で、カンボジア風の顔立ちをしていた。

「どうです、この料理、おいしくありませんか？」と主人が一口も口にしない私に言った。

女が雰囲気壊さないで、という感じで

「いいから、騙されたと思って食べてごらんなさいよ」といった。

魚と野菜に香辛料と香菜が一枚の皿に盛られている。女は平気で食べている。私たちの後ろは大きな棚になっていて、グラスや酒瓶が並び、店には主人しかいない。ウエイトレスがいない。床は黒光りしたかなり使い込んだ木でできている。午後の静かな植物園の木々の間に割り込むように優しい陽射しが店を明るくしていた。

「ね、食べなよ」女が言った。

私は異国の食事に抵抗を感じながら一口食べた。口の中に不思議な香りが満ち、勝手に舌が動くような気がした。急に腹が空き始め、次々に平らげていった。

「ね、おいしいでしょ」

「ああ、うまい」

「だから言ったじゃない、あなた食わず嫌いなものよ」

主人が逆光の中で微笑んで、白い歯だけが目立った。主人に礼を言ってビールを飲んで店を出た。最後まで主人の微笑みは変わらなかった。女がお堂があるはず、といって植物園の奥に手を引っ張った。迷彩服を着た多くの軍人の行進とすれ違い、だんだん奥に入っていった。足場が悪く、ごろごろとした石を用心して見晴らしのいい小山へ出ると、一面鮮やかな緑の芝生が広がり、そこに座った。遠くに煙突があり、煙が風で右に傾いていた。薄ら禿の体育教師が風で残り少ない長めの髪が耳の上でひらひら揺れていたのを思い出した。浮上バイクや浮上ジャケットを着た人が空を横切っていく。リニアビルがどこまでも連なっていた。

「納得いかないんだけど、モグラの…」

「しつこいわ」さらに女は次のような話をした。

シケモクと呼ばれた男の子だった。知的遅滞があつて、いつも涎掛けをしていた。年齢は小学6年生ぐらいだった。タバコの吸殻を拾っては吹かしていつも公衆便所の横に飴色の椅子に座っていた。その椅子は近所の葉巻バーで用がなくなったスツールだった。大人用なのでいつも足をシケモクは揺らし老人のようにくゆらせていた。

「この子は馬鹿な子」とシケモクは人が横切るたびに言った。

夕方になると母親が手入れをしていない色の抜け落ちた長い髪をシニヨンにして迎えに来る。そして家の前に括りつけられる。長い黒い綿のロープで足、手、胸、頭を柱に結わく。シケモクは最初は泣いているが、しばらくすると小便を漏らし、ぐったりとする。口を尖らせ、「この子は馬鹿な子」と呟く。前の村長は施設に預けるよう母親に言ったが、聞き入れない。母親は売春で稼いでいた。母親が食事を終えると、家に入れる。黄色く変色した米にお湯をかけ、シケモクの口に運ぶ。いやいやをすると殴った。数年して、一ヶ月で、身長が一気に伸び、筋肉が盛り上がり、大きな体に成長した。「馬鹿は大きくなるもんだ」前の村長はそう言って笑った。性欲が芽生え、村の女の子に抱きつくようになるころ、シケモクは警戒され、治安取締局が乗り出した。村長の娘が襲われたためだ。その後何年かして、村に帰ってきた。母親の押す車椅子に乗っていた。村長がにこにこして、「いい子になったじゃないか、どうだね、この子を相撲取りにしてみてもは」「もう駄目なんですよ、この子」シケモクは母親としばらく暮らしていたが、家の前に雨風にさらされた車椅子は長いこと使われていないのがわかった。家からドンドンという音が昼夜問わず聞こえてきた。シケモクが壁に頭を打ち付けている音だった。苦情が出て、車椅子に固定されたまま雨ざらしのシケモクは死んだ。

女がそんな話をして、

私は「誰も助けないの？」と訊いた。

「そう、お堂に行きましょう」

私たちはお堂に向った。左右に羽を広げたような真っ赤な屋根で、その本堂の前に黒い大型地上バイクがあり、荷台に黄色の大きな箱を乗せていた。私たちが本堂の階段に腰を降ろすと、バイクの持ち主が現れた。

「危ないからはなれて！」男はバイクのエンジンをかけると、苦痛を覚える轟音を響かせた。

少し離れたところで見ていると、男は黄色の箱を開いた。中から黒飴に羽が生えたような肥えた熊蜂が一斉に飛び立った。

「何をしているんです？養蜂ですか？」

「冗談言っちゃいけない、おれは人に迷惑をかけるのが大好きなんだよ」



熊蜂が全て飛び立つと、男は笑いながらバイクに乗り、ものすごいスピードで去っていった。バイク音が消えるころ、寺の中は静かになった。

「孔雀明王を祀っているんだ」

「何？孔雀明王って？」

「孔雀は毒蛇を食らうんだ。災いを追い払うらしいよ。」

女は身動きせず、孔雀明王を見つめていた。そして、顔をしかめた。

「なんか臭うわね」

私はあたりを調べた。ちょうど私たちの後ろに何かが転がっており、人形か、紙細工かと思い、じっくりと見た。

「こんなところに猫のミイラがあるわ」

「どおりで臭うわけだ。薄気味悪いから帰ろう」

機関区のようなところで、鉄道路線が何本も走っている。電車はもう来ない。空は日が沈んで青黒くなったり、夜空のようになっていたり、めまぐるしく変化した。遠くで大火事があり、空が赤くなっていたりもした。ライトをつけた一機のヘリコプターが列車の電線に引っかかりそうな低空飛行を続けている。何本もの線路の中央に倉庫があった。その倉庫は馬小屋のような作りであった。一箇所は粘液が詰ったプールが倉庫内にあり、もう一つの倉庫は血液にまみれた肉や切断された腕や足、手首などが山になっていた。小林はその血まみれの倉庫に身を埋め、自ら性行為をはじめ射精した。泡のような精液を全身に塗り続けた。この光景を小林は好んでいた。

あの処刑部屋から帰った小林はうたた寝をした後、小林はお酒を飲んだときの後味を確かめるようにして、布団の中でゆっくり瞼を開き、足元に昨夜撲殺した腫上がった女を見て、足蹴にした。女は少し傾いたがダルマ起しののように、もとの仰向けになった。

小林はピンクのウサギが描かれた学習機に向かい本棚から「児童心理学」とウイスキーを取り出し、ストレートで飲み、水色の低い椅子にもたれて首を回した。ばねが軋んだ。壁にはアルファベットが大文字小文字で印刷されたポスターが一枚、そのとなりには同じくポスターに50音と小学生が学習する漢字が100個並んでいた。

昨夜撲殺した女のことなどもう忘れていた。

児童心理学の背表紙にディスクが貼り付けられていた。それを机に置いてある再生機にセットした。画面には教職についていたときに撮影した「のんびり和尚」という演劇が映った。画質はかなり悪い。染色体について、メンデルの遺伝についてしつこく聞いてきて、イライラさせる男子児童がいた。その子が和尚役で出ている。中盤に差し掛かり、和尚役の子がきょとんとした。せりふが出てこない。助けを求めるように上を向いた。小林はこのシーンが好きだった。満足するまで何回もそのシーンを再生した。

満足した小林は妻の部屋に入った。そして妻を傍らに立たせた。小林とその妻の間には子供はいない。小林の妻は醜かった。色黒でたいていの男は振り向かない様子であった。小林は妻にしゃがませ、視姦をするのが好きだった。一切妻には触れない。

「きみは素敵だ」小林は言った。

妻が俯いて紅潮した。立とうとすると、

「まだ、駄目だよ、その姿勢でいて」

再びしゃがんだ。小林は、大きな照明ランプを持って、そこを照らした。

孔雀明王を見た後、女は煙草を吸うらしく、シガレットケースから両切りの煙草を一本取ると、火をつけ、口についたタバコの葉を指でとり、遠くへ飛ばした。その飛ばした先に目を凝らすと、一軒の家があった。というのも、女はハスキーな声で「この先よ」と言いつつ指をそのまま指示して腕をあげていたのだった。「村長の家。前の村長は腸が破裂して死んだのよ。かわいい子もいるわよ。じゃ、あたしはシンゲンのところへ行くわ。じゃ」

私は手を伸ばして女をつかんだ。

「何よ、痛いし、それにそういうことってもう少ししてから触らないかしら」

「ここはどこなんだ」

「夢んなか」

「現実に戻れないのか」

「帽子を持った以上はね。あとは、モグラが脱出させるらしいけど、あたし起きても昏睡が三年続く植物人間だから帰っても仕方ないのよ」

「そうだったのか。すまなかった。行ってみる。」

「いい仲間になるよ」

「そうだといいけどね」

村長の家は、屋根が大きな、おそらくクジラの骨だろうか、あばら骨に油紙を張り付けた屋根で、茶色く屋根が濁って光っていた。周りは漆喰で、左官屋さんを呼ばないらしく、ところどころが修繕が必要であり、剥がれ落ち、中の竹の骨が見えているざまだった。ノックして、「今いる空間はどこかを知りたいと言ったら、ここを紹介されました。」という、気持ちよく入れてくれた。

村長の家には「ヨウコ」と呼ぶ若い女がいて、「世界平和」という文字が剥げかかってプリントされた、よれよれのティーシャツに細身のデニムをはいていた。裸足だった。

そのとき、その若い女は村長家の窓辺で本を読んでいた。日の光が窓枠を輝かせ、彼女の顔を光が包んでいた。庭に生えている樹木の風に揺れるごとに窓は音をたて、そのたびに読書を中断して、彼女は視線を窓から庭の樹木に移した。

村長が呼ぶたび、半身を起こさなくてはならず、そのたびに赤ん坊のような裸足の指がちょこっと曲がる。

「なに読んでいるの」私は隣に腰を屈めて尋ねた。

「トイレで自給自足をする男の話し」

「妙な話だね」

「こんな話なの」

若い男が便所の中で稲を育てている。便器を取り外した下水管の穴で用を足す。それが肥料となって稲が育つ。わずかの稲で食料にするには乏しい。それでも男は稲を育てつづける。誰も住んでいない家において、台所から洗面器に水を張って、稲に与える。自給自足の生活だ。男は便所で眠り、食事は稲からとる米だけだ。誰とも交流をしない。外部から

遮断された空間の中で男は生きていく。閉鎖された空間に陥れられ、慣れを生じる話ではなく、すすんで世間との接触を切り離れた男がどうなるのかというのが大筋だった。ヨウコが読んでいるのはそんな話だ。

ヨウコは読書を止めて、私に話し掛けてきた。

「村長は、ヨウコっていうの、昔の奥さんのことなのよ、ほんと、わたしユキっていうんだけどね」ユキは少し上を向いて笑った。

村長の家に4歳になる男の子がいた。村長の孫だという。四角い顔をして、赤い頬をしていた。髪は伸びて後ろで束ねている。さかんにユキに機関車トーマスを買ってくれるように頼んでいる。このうるさい子供が始終、私とユキの間に入ってくる。

「クリスマスに買ってもらいなさいよ」

「なんで？」

「サンタさんが貧乏な子供におもちゃを買うからよ」

「うちって貧乏なの」

「知らない」

「なんで？」

「知らないわよ、サンタが来たら、貧乏だし、おじいちゃんを買ってくれたら、サンタは来ないのよ」その子供が歯を食いしばって怒っている。そしてユキの足を蹴っ飛ばして逃げてしまった。

「痛い！なんなのよ！うるさいんだ。あいつ」

「カメムシみたいな顔して怒ったよ」

「村長が甘やかすからなのよ」

ユキのイライラが収まり、彼女に促されて、廊下に出て、書斎の隣の物置に入った。彼女が隙をついて誘惑したのだ。とても狭い空間なので腕を回そうとすると棚からママレモンが落ちてきたり、ダスキンのモップがユキの足に絡んだりしたため、うまくいかない。

「外にしない？」ユキが言った。

私たちは指定公園に深夜、忍び込んだ。芝生の上に転がり、腕をまわし、抱擁をした。ユキの髪が夜露で濡れ、うっすら開けた目が月の光で見えた。吐息が漏れ、しばらく仰向けになって空を見ながらじっとしていた。

「アリが耳の中に入らないかしら」

私は空を見て、

「空であの光が横切るのは人だろうか」

「そう、家に帰るんだわ」

おはぎをぼとぼと、村長の孫は口からこぼしていた。ユキは、「ちゃんとお口に入れなさいよ、だらしがない！」と叱りつけると、孫は、「ジイジイに言いつけてやる」と、あくまでもこの二人は敵対関係にあるようだ。

「そうやって喧嘩ばかりしているのかい？」と私が尋ねると、子供はぼとぼとまた小豆をこぼして、

「今食事中だよ」と口をとがらせて答えると、ユキが、子供を睨みつけ、頭上から手を叩き落とす真似をして、

「答えなさいよ、だいたい生意気なんだよ」と言いかけた瞬間、子供は首をすくめた。それは手から頭部を守るための格好かと思ったが、テーブルの上に、男が天井から落ちてきたのだ。皿はひっくり返し、子供は目を大きく開き、掌をいっぱいに広げて、それはあんこで汚れてはいたが、一方ユキは身を引き、顎を引き、状況をつかもうと目を見開いて、落ちてきた男をじっと見つめた。そして、天井から男が落ちてきたことが分かりかけるころになると、意外に冷静に、誰なのかを考えて、

「ジャンクじゃない？」と、問いかけた。

「ああ」ジャンクは、ひっくり返ったコップの水が顔の左側を銀色に濡らしてはいたが、落ち着いて答えた。

私はテーブルから離れていたのだから、ジャンクが紹介される前に、何かこの男は見たことがあり、それは夢の中だったのか、現実だったのかははっきりと割り切れなかったのだが、ひょっとすると大昔の子供の頃の親友だったのじゃないかと思わせる節があった。しかし、いつの間にか、その認識は確信に変わった。すると、不思議なことに、ジャンクは、テーブルから身を持ち上げ、正座をし、親しく私に、「ああ、お兄ちゃん」と答えた。その時、村長のドアをノックする者がいて、聞き耳を立てていると、

「いないみたいだ」

「出直そうか」

「いいや、やつはいるよ」

ジャンクは追ってきたと判断をし、黄色の帽子をかぶると、「あとで後程」と言い残して、床に飛び込んだ。外では、「反応がある」「ここにはいない」とあわただしく村長の家の訪問を諦め、おそらく急ぎ足で探しに出かけたに違いない。

「村長、この世界はなんでしょう」

「夢の中なんだよ」

「夢ってなんでしょう」

「羽を伸ばすところさ」

「しかし、悪夢というものもあります」

「昔どこかで見たことがある。眠る 30 分まえに好きな俳優の写真を見つづけるんだ、そうすると夢にその俳優が現れてデートができるらしい。」

「ですが、村長、いま現に私は夢の世界にいることを悟っている、あるいは気付いているわけですね。そうしたら、起きませんか？ふつう。それが見続けている。」

「抜け殻を考えると言い、元にまだ戻れないんだよ、あなたは。何かの理由で。」

「となると、ここは全人類が共通している夢、夢の世界地図はあるのでしょうか。そうとしか考えようがありません。それとモグラの役割はなんなのでしょう。」

「なに、やつらは気まぐれさ。統一しようとしている気狂い教師がいるんだ。ソイツは、おそらく悪夢の源泉を知っているに違いない。悪夢の力がなくては、あの行いはできない。ふつう、我々は正常な夢を見る。これはどの階層か知らんが入り込むんだ。また、悪夢やら淫夢を見る、これもある階層に入り込む。たしかに秩序だってはいる。」

しかし、その各階層はスープの中と同じだ。そこまで、あの気狂いは秩序を持たせようとしている。教師の性格かもしれない。それを混乱させるのがモグラさ。いたずら坊主なんだよ。」

「気狂い教師とは小林ですね？」

「ああ、そうだ。まだ話したりないようだが、もう勘弁してくれ、これ以上はよく分からない。そんなに知りたいなら、ここへ行くといい。気が向けば役立ってくれるだろうが。そうでなければ、あなたは格好のおやつだ。」と言って、村長は名刺を差し出した。名刺の裏には地図があり、「ここからそう遠くはないよ」と、村長は付け足した。

村長の家からマンホールに入り込み、下水道を歩き続け、下水道の煉瓦壁に「心理相談」と古いチラシが張り付けてあり、矢印のあるところにマンホールの出口が見えた。そこを出ると、植込みの中で、振り替えると、マンホールが地下鉄の排気口に変わり、地下鉄がヒステリックなレールとの摩擦音を立てて、風とともに走行しているのが分かった。植込みから出て、名刺を再び見ると、固定式ビルの10階に心理カウンセラーが事務所を開いていた。

受付に行くと、チンパンジーのオモチャが置いてあり、私は頭を叩いた。「御用の方はどうぞ叩いてください」と書いてあったからだ。チンパンジーがシンバルを鳴らすと、奥から白衣を着た面長の、長い髪を頭の中央で分けている女が出てきた。

「ここの梯子を上って、私が先に上がるから」といっても、白衣の下はスカートのため、恥ずかしくないのだろうか？とにかく上がっていく間、上をなるべく見ないようにしても、白いふくらはぎが見える。

梯子を上る途中で老婆が泣き止まない男を背負って、ゆっくり空中を上から下降してすれ違った。老婆は、

「泣くな！男だろ！そんなに地獄は怖くないから！」といった。

ピンクのイソギンチャクが梯子の裏の壁にいっぱい生えていて、中にはペニスの形のもあった。私が上りつづけると、それらは勢いよく壁に潜っていった。

診察室に入ると、動物園の匂いがした。私は戻れない事情のほか、夢のこと、気狂い教師のこと、モグラのことをくわしく訊こうと、あらかじめ要点だけは伝えた。しかし、結果はおやつになったらしい。

「深く息をして、背中が沈むような感じで」白衣の両性具有者が言った。

「あたしのおっぱい舐めてもいいのよ」

「何か、言いました？」

「いいえ、そのまま、続けて…」

「無意識の問題みたいね」

「なんです？無意識って…」

「いまにわかるわ」

電気をつけると、「ハイご苦労様」と乾いた声でいった。部屋の隅のデスクを横にして足を組んで座っている。部屋の隅は薄暗く、何をしているのか、目だけがみえる。潤い、光る黒目だけの目だ。げっ歯目の目だ。

「あたし裸、いま」

「で、なんです、戻れないわけは解決したのでしょうか」

「ハイ、解決しました。いまササキの体温計を中に入れたところ…」

「答えを知らせてください、それにあなたは村長からの紹介を知っているでしょ、早く服を着てください」

「嫌よ・・・」小さいすぎる声でよくわからない。とても大きく膨張したペニスが見えた。

「あの、ここにきたのは、何で夢を見ないか、ってということなんですよ」

「たぶん不足…」

「なに？」

「寝不足だと思う」

村長からお金を払ってもらうことにして、事務所をでると、村長の馬小屋の中にでた。馬が荒い息をして眠っている。

「どうだったね、不思議だろ、あの男女」

「結局、分からずじまいでした。」

「おやつかわりか。もう遅い。眠るんだ。ヒントが出ることもある。『ロレンツォのオイル』という映画を知っているか？」

「知りません。いつか見るつもりです。」

私は村長の自宅に一泊することになったが、私が眠る枕もとのちょうど上にお稲荷さんがあって、灯明の明かりでなかなか寝付けなかった。いつもランダムに回り続ける時計を見ると真夜中の3時で、それなのに村長の4歳になる孫がプレゼントを買ってもらいたいらしく「お稲荷さん、お稲荷さん、クリスマスに・・・」と拝みにくるため、「へへへ、お前を食ってやる！」と、布団の中から低い声を響かせると、孫が悲鳴を混せて泣きながら寝室を出ていった。

ユキと私は大通りと呼ばれるリニアバスターミナルに繋がる道を歩いていた。勾配のある坂を上がっていると、浮上バイクや浮上ジャケットを着た人らがスピードを上げて上空を通過していった。それらは規則正しく、正確な軌跡を描いて飛んでいた。坂をあがると、前方、遠くにリニアビル群がせりあがってきた。通りを跨ぐように半円の緑色の表示板が掲げてあり、そこには青い古めかしい文字で「博愛協会通り」と書いてあり、その横に下手な小林の似顔絵が描かれていて、似顔絵の小林は笑っていた。

ユキが盛んに空腹を訴えるので、固定式ビルの谷間に入っていった。路地を跨ぐように洗濯物が干してあったり、地面が陥没し、水がたまっていた。飲み屋はその狭い路地のさらに裏手にあり、路地から見ると、暗いじめじめした感じのところにビールケースを椅子代わりに酒を飲んでいる男たちが見えた。将棋を路地でさしている人だかりを抜け、路地を進むと、死体に見える老人が病院の払い下げのようなベッドを露天にさらし、眠っていた。女と腕を組み、寄り添って歩いている男は、恐らくその女を買った雰囲気だった。義手の銀色が鈍く光り、白い布を巻いたような傷痕軍人が地面に座り込み、アコーディオンを演奏していた。寂しい調べで世界が滅びる予兆みたいに聞こえた。

「ここでもいいかな」私はすっかり疲れていた。

「いいわ、中華屋さんね、私チャーハンがいい」ユキは言った。

路地から地下に伸びる人がやっと通れるくらいの狭い階段を下りていくと、中華なべで具材を炒めるせわしない、追い立てられるような音がした。換気設備が行き届いていないらしく、赤で統一された店内は油の蒸気で煙かった。隅の一席に私たちは座った。ひどく汚れた白衣を着た店員が来て、注文を訊いているのだが、腋臭らしくひどい異臭を放っていた。

料理を食べていても、鼻にその異臭が残っていて、料理自体の臭いみたいで気分が悪くなった。

「たべないの？」

「ああ、胃が変だ。よかったら、食べてくれるかい？」

結局ユキは２皿のチャーハンと野菜炒めを食べた。料金を払い店を後にすると、

「お腹すかないの？」

「ああ、あの店員の脇が臭ったんで、げんなりだよ、女の腋臭は嫌いじゃない」

「すけべ」

路地を引き返し、リニアバスに乗るつもりだった。

「ねえ、この辺自殺が多いのかしら」

「なんで」

「地面、見て。チョークで何か書いてある。」

「浮上ジャケットの墜落だよ、これ」

「そうかしら」

たしかに言われるとおり、チョークで文字や図形が書かれていた。

バスターミナルに着くと、職員が、もうリニアバスは明日以降です、地上バスしかありません、という。仕方なく地上バスに乗ることにした。

「私の叔父さんが、地上バスはホフクバスだって言っていたの。のろいし、故障が多いし、ガラクタだって言っていた」

「ヘコキバスって言う人もいる、プスープスーって空気を年がら年中出すからだろうね、叔父さんっていくつくらいの人なの？」

「もう死んだ。とにかく文句屋。褒めたことなんかないの。皆に嫌われていたわ。そんな叔父は死ぬまで文句ばかり言っていた。テレビをつけると叔父のコメントが始まって、耳が遠くて大声だから、テレビが聞こえないくらいでしょ、それに長いし、叔父のコメントは聞かないと怒るから、みんな黙って聞いているの。疲れちゃう」

「すごいね」

「強烈よ」

地上バスに揺られて、３０分くらいすると、日が沈み、森の中を走っていた。バスに灯りが点いた。終点で降り、運転手が

「この先は徒歩になるよ、双六みたいなものだよ」といった。

そのとおりで、終点の先の道を歩くと、地面に大きく「スタート」とあり、その先に切り株のようなものが埋まっていた。私たちはジャンケンをして、一歩進んだり、振り出しに戻ったりした。そんなことをしていたので、すっかり遅くなってしまった。

旅行案内業と肩書きを持つ女は事務所で書類や本をダンボールに詰め、積んでいった。女が私たちを見て、

「ああ、滝が来るのよ、大水。一日一回は来るの、だから忙しくって」

女の話ではこの集落はどこから来るか分からないが、大水がうねって流れてきて、飲み込んで、干上がるという。そのため、大事な物はダンボールに入れて積んでおかないと、下流に流されると言うのだ。建物は無事らしい。建物の中だけが流されるそうだ。

「で、旅館を探していらしたご夫婦ね」と女が言った。「もう温泉街みたいなもので、ほらごらんさい」といって、事務所の窓をさす。



すると、干上がった川の中に私たちはいて、川岸は丸石で石垣になって、樹木の緑が見下ろす、砂利を敷き詰めた小道が川の兩岸を走っていた。蛍が出そうな雰囲気だった。

「私たちの旅館は？」

「あそこの、ほら提灯があるでしょ、そこ」

砂利道をユキと私は歩いていった。振り返って集落を見ると、まだ窓の中にはダンボールを積み上げる女の姿が見え、さらに他のビルの窓にも同じ作業をしているせわしない人々が見えた。

部屋の明かりを消してみると、窓の向いが宴会場で、人々の騒ぐ声が聞こえた。

「御銚子や皿の音がするわ」

「楽しいんだろうね」

「ね、こっちにこない？何の音かしら、コーっていつている」

「大水だよ、気が散るかい？」

「平気」

翌朝、旅館を出て、再び集落を見ると、人々は今度はダンボールから荷物を出していた。

ユキと二人で川岸の砂利道を歩いていると、

「ね、柳ってさ、よく幽霊が出るでしょ」

「ああ」

「わたし、なってみる」

そうユキが言うと、彼女が川岸から川へ飛び込んでしまった。私はおどろいて、川を覗き込むと何もなくて、大きな岩や葦が生い茂っているだけで、水が干上がっていた。私は、叫んで、彼女の名前を呼び続けた。足の悪い少年が通り過ぎると、光景は一変した。どこかのベージュ色の建物が見えた。近づいてみると、

「社員寮なんですよ」支配人が言った。

なるほど互いのプライバシーを守るためか、建物は斜めに各部屋が設けられており、一つの部屋からベランダに出てみても、隣の住人と顔を合わすことがない。一つ一つの部屋を外から見ると、誰も住んでおらず、一ヶ所だけから煙が立ち昇っている。

「バーベキューなんですよ」再び支配人が言う。三人ほど男がいて、網を囲んで、イカを焼いている。社員は無言で、表情は死んでいる。ただたまに居合わせた、電車の乗客のようだった。何か聞こうにも気が引ける。一人が

「もうじきだよ」と言った。2人が肯く。背後の生い茂った椎の木が風に揺れ、音を立てた。煙が大きく揺れた。

「たいへんだよ」私の近所にいる子供がやってきた。

「おじさんとか、怖い人がいっぱいいるから、知らせて来いっていうから来たんだよ」

「怖い人って？」

「知らない、とにかく怖い人」

支配人に、この辺にタバコ屋はありますか、と訊いた。すると、支配人は電車で一駅すると大きなスーパーがあるから、そこならあるだろうといった。

駅に着いて、こげ茶色をした木製の電車が入ってきた。線路の衝撃を直接受けるため、ひどく揺れ、乗客はつり革を持って項垂れていた。多くの死体がぶら下がっているようだった。駅に到着して、さっそくタバコ屋を探し始めた。

たしかに支配人のいうように大型スーパーがあった。しかし、そのスーパーではタバコは取り扱っておらず、二階から渡り廊下を使って、市場に出られるらしい。ギシギシいう狭い階段を上がると、小さな蛍光灯でたいへん薄暗かった。その弱々しい蛍光灯の下には呉服を着たマネキンが転がっていたり、自転車の古くてサドルもないものが錆び付いて倒れていた。

「渡り廊下は？」と私がいうと、隅に寝転んだ店員が指をさした。不透明なビニールで仕切られた奥へと入っていくと、トンネルのような場所に小さな店が詰って営業していた。

パイプがショーケースの中に乱雑に重なって置かれ、とても高い値段だった。

「紙巻タバコはありますか」と訊くと

「うちは扱っていない」とそっけなく答えが帰ってきた。

仕方なく、外へ抜けると、住宅街に出て、日本家屋でも古びた杉板が雨ざらしで、傷んだ家があった。その家の二階の一角が軒こそあるものの奇妙な具合に削られており、そこには薄汚れた麻袋で作った人形が、詰め込みすぎた衣装ケースのようにぎっしりと垂れ下がっていた。自動車の黒いファンベルトのようなものが人形の首に繋がり、上で吊るされている。この家には近づかないほうがいい気配が漂っていた。

「止めときな、あすこだけは」と誰から聞いたのか知らない文句が頭に浮かんだ。

自分の家に行くと、家の周りに近所の人が棒立ちに見学していた。二階の曇りガラスからユキの泣く声が聞こえたので、玄関に入った。すると、2階に続く階段にはひな壇のようにして、任侠が大勢で記念写真をとっているところだった。目つきは鋭く、顔も精悍であったが、皆一様に痩せていた。とても通れそうもないため、いったん外に出て、家の脇から裏庭に出ようとした。家の脇には大きな物置があって、二階のトイレを増築したため物置の上の空間は這って進む感じだ。クモが巣をいっぱい作っていた。夕焼けのオレンジ色の中、裏庭の木のシルエットが揺れていた。物置の上を這い、どうにか裏庭に出た。裏のサッシの前にユキの運動靴が置いてあった。このサッシは開けにくいので、網戸を引っかけてしまい、今では剥がれた選挙ポスターのように半分垂れている。梯子をとなりの裏庭から借りて、二階へ向け、立てかけた。まだ、ユキの泣き声がする。どうにか二階に行くと、スーツを着た会社員や学生服を着た男が4畳半の部屋にたくさんいて、机の下でユキが体を丸めて泣いていた。私はすごんで、

「出て行くんだ！」と叫んだ。

男たちは言葉を発せず、表情も変えず、階段を軋む音を立てながら下りていった。男たちが出払ってから、ユキに何をされたのか訊くのだが、何も答えが返ってこなかった。

私が階段を恐る恐る降りようすると、任侠の集団はなく、かといって振り返ると、見知らぬ街の坂の途中で、またしてもユキがいなくなってしまった。私はユキを探していた。

雑貨店があった。中に入ると、コーヒーショップと処方薬局を兼ねた店であった。カウンターの奥に40歳くらいのエプロンをつけた女が一人で切り盛りをしており、カウンターの前には、大きな本棚が斜めにせり出していて、その本棚の周りを囲むようにして安っぽいソファが置かれていた。店内には薬局の待合室のように処方箋を持った老人がいっぱいいた。ソファが一ヶ所空いているので、私はそこに座り、コーヒーを注文した。カップに入れたコーヒーを受け取り、飲もうとすると老女が隣に腰掛け、カウンター奥の女と世間話を始めた。しばらくして話が萎むようにして、その老女は一人呟き始めた。「この処方箋、何も書いていないのよ」わたしが横から処方箋を見ると、

確かに何も記入されておらず、頼りなげな彼女の文字で薬の名前が鉛筆で書き足されていた。

「先生に書いてもらったほうがいいんじゃないですか？」

「でもね、…センスもお忙しいでしょうし」と言った。

私はそのときコーヒーを半分以上飲んでいたが、この老女から便臭がするため、喉にコーヒーが通らなかった。それなのに私はカウンター奥の女にお代わりを注文した。女は無愛想にコーヒーを渡し、私は受け取ったが、店内の空気が埃っぽく、老女の臭いがいっそうひどくなったので、私は一口もつけずに、コーヒーをカウンターにおいて、店を出た。

高架歩道はとても道幅が広く人は疎らで黒いアリのようだった。私は長いことユキを探して歩いていたが、疲れてしまい、高架歩道脇の螺旋階段が続く出口に向った。螺旋階段をゆっくり下りて、木戸を開けると、そこは病院であった。

病院とはいえ、廊下がなく、各診察室を通らなくてはならない構造だった。私は小児科の診察室にいた。診察室の片隅では消毒器の蒸気がゆっくり立ち上っていた。硬い、分厚い木の机に医師がいて、カルテを書いていた。インク壺にペン先をつけて、静けさの中、ペン先の擦れる音しか聞こえなかった。看護婦がマスクをつけ立っていた。私はそこを通り抜けると結核病棟に通じていた。咳き込む音しか聞こえず、暗くてよく見えない。息を止め、ドアを抜けると、更衣室になっていた。私の背丈くらいの高さに白い、小さな角型のタイルで固められて湯船が3つL型に配置されていた。スポウツ選手は背丈が大きいため、このような湯船になったのだろうと推測したが、それにしても高すぎる。配管は天井に剥き出しになって、カルシュームの結晶を纏っていた。もうまもなくスポウツ選手が来るので、出なくてはならない。迷路のようになっているので湯船のタイルづたいに歩いていくと、便所に出た。腐った蛋白質の臭いが強烈で、便器はなく、中央に黒い排水溝への穴だけがあり、その周りには汚れたちり紙がくしゃくしゃになってたくさん積もっていた。どうにかシャワー室らしき所にドアがあることを発見し入ると、消化器科に通じていた。ズボン姿の看護婦がいた。黒い十字架がプリントされたヘルメットを被り、話し掛けてきた。

「何か用ですか。消化器科ではありませんよ。精神科病棟です」と、とても早口で言った。

困ったことになった。今度は出口がない。患者が私がポケットから取り出した黄色いキャップを取ろうとしてくるので、逃げ回った。看護婦らは口で注意するだけで、患者たちの動きを制止してくれない。部屋の隅まで走って、ようやく被り、地下に潜った。けっきょくユキのいる外科にはいけなかった。

ジャンクは地上を歩いていた。大きな更地が階段状に、ちょうど棚田のように伸びているところを歩いて、私は伝えておいたユキの失踪をジャンクは手を貸すとのことで探してくれている。私は上空で、コックピットにいて、冷房が効いていた。海岸線を旋回し、地面に近づいたり、離れて列島が見えたりした。不安定な視界だった。ジャンクは「ここまで探したがいないよ」と言った。そして「ノンノン様なら分かるかもしれない」と付け加えた。

「だれ？ノンノン様って。」

「俺とユキさんなら知っている。肝心のユキさんがいない、村長なら知っている」

「連れて行ってくれるか」

「かまわない」

脳信号は止まった。

ジャンクと私はノンノン様に会いに行った。

「あのやかましい子です、どこにいますか」

「そうだね、迷ってしまったみたいだよ、それに帽子をなくしたらしい、なにせ入り組んでいるからね、交換機のようにして接触するにしても確率は低い。見つかりそうもないね」

「どうにか探す手立ては」

「この帽子と言うのは階層が変化するだけで、この世界から出ることではないんだよ。帽子がないとすると、この世界のどこかでずっといつづけることになるんだ。それがどこにいるか調べようがないんだ。ユキさんは恐らく見つからないでしょう、飲み込まれたんだよ、諦めなさい。気持ちはわかるけど。もし、帽子を濫用して探そうとすれば、危険だよ、特にジャンク、お前は気をつけたほうがいい」

そう言われて、私とジャンクは別々にユキを探し始めた。

私は何度も帽子を被った。自棄を起こしていた。前の病院に再び入ったり、ユキと歩いたバスターミナルにも出たし、村長の部屋にも出た。ただ一箇所だけ気になる空間があった。

長屋があった。その長屋の入口には八百屋が借りていて、産みたての卵がボール紙に敷き詰めた籾殻の上に収まっていた。その先に井戸端があって、人影はなかった。ある一軒の家の屋根にはおそらくこつこつ集めたらしい植木が数多く置いてあり、物干し場は今にも崩れそうであったが、物干し竿に肌着が干してあった。またある家では戸口が開いており、室内は暗いのだが、裏から漏れる明かりで室内がうっすら見通せた。その薄暗い居間には空咳をする老人が寝たきりで放置されていた。

長屋を抜けると広い河原に出た。長屋の軒が退いていき、巨大な団地が船の上に建っていた。十二階ほどの高さであったが、横幅は極端に長かった。豪華客船の優雅さはなく、どうも動く団地を目的に造船されたかのようで、寛ぐというよりも、その団地からの生活臭が感じ取れた。

団地の一室には簾を垂らし外が明るいというのに、その一室を見ようとすると、簾越しに室内が見えるため、夜ではないかという錯覚が生じた。ステテコ姿の中年男性が足を伸ばして、崩れた姿勢のままビール瓶を傾けていた。またある一室では若くして脳に損傷を受けた息子の介護をするやつれた母親の姿も見え、ある一室では小さな子供が、兄弟げんかをして、一人が組み伏せていた。

団地を載せた船の速度はとても遅く、進んでいるのか、停泊しているのかが分からなかった。

私は長い間その船の一室一室を注意深く見ていたが、ユキはおそらくこの団地船の一室にいるのではないか、これになぜか確信を持っていた。しかしあまりにも数の多い部屋で、船を反対から見ればまたこちら側と同じ数の部屋があるのであり、注視するも根負けをし、すっかり疲れきってしまった。そしてあきらめた。もちろんこの目の疲れる注視することに労をいとわないことこそユキを心から真剣に探す気はあるのか？と問いかけられ、そして妙なことにユキへの愛情の度合いを測られているような気がした。結局は見つけることなど不可能なのだとおもい、しばらくぼんやりしていた。

団地船は下流に向かって動いていたようで、船尾が見えるころには団地の非常階段が目に入り、もうユキには離れ離れになってしまうのだと悟った。

私は再び長屋に入り込むと、井戸端には日本髪に割烹着姿の女が4、5人いて、無言で私を見ていた。まるでひどく責められているかのようだった。女一人探せない男と思われる気がした。

再び合流したジャンクと私は街を走っていた。そこに合流した見ず知らずの男も並走した。高架歩道を三人は走っていた。

「こいつさっきからいちいちうるせえんだよ」とジャンクは言って、ジャンクと私は男を縁に追い詰めると、その男が下に飛び降りた。頭蓋骨が割れ、透明の液が流れ出し、死んでしまった。しばらく見ていたが、ジャンクは

「どうせたいした奴じゃないし」といった。

ジャンクと私はよりスピードを上げ、息を切らして、地下鉄の入口で深呼吸をした。体中から汗が流れた。そこは地下鉄の終着駅で、田圃に囲まれ、土でできたプラットフォームにはけっこう人がいた。野菜を籠に入れ、背負い、もんぺをはいた農婦がいて、帽子を被った会社員もあり、学生たちもいた。お花畑の中を真っ赤な丸の内線がゆっくり入ってきた。私たちはその地下鉄に乗り、暖かな日を浴びてのんびり揺れていた。ジャンクはしきりに

「あいつはたいした奴じゃないし」といった。私は答えようがなかった。

警察はあの遺体を検死するだろうし、目撃者がいれば、私たちは捕まる。

一回郊外に向け走り、所沢に着いて、引き返し、都心に向うけっこう不便な丸の内線だった。所沢での停車時間はかなり長く、乗客の数も減り、私たちは降りた。青い砂利の引き詰めた、何本もの線路が走る機関区のような駅だった。ジャンクと私は別れ、発車時刻には戻ろうということになった。

一軒の大型書店に私は入った。地下3階で6階建ての古風な書店で、リニア化されていなかった。1階の写真集売り場で私は時間をつぶしていたが、死んでしまった男がとても気になった。緊縛された女の写真を見ていた。和服を着て、車椅子に乗って入店した女と向き合う形になった。急いで、写真集を本棚に戻そうとしても、本棚に隙間のないほど詰っていたため、その写真集がなかなか入らず、帯を引っ掛け破れかけてしまった。どうにか戻すと、車椅子の女が後ろを通過した。陶器の写真集を取り出し、見ていると、車椅子の女がいつのまにか後ろにいた。

「いい趣味でいらっしゃるのね」

「とんでもないです、時間つぶしです」と私は答えた。

「私も体が不自由になって、気づきましたの。人の命は大切。」

とても気になって、書店を出た。ジャンクが駅の前でイライラして待っていた。

「電車行っちゃったよ」ジャンクが言った。

「あのさ、自首したほうがいいと思うんだ」私は提案した。

「ああ、そう考えていたんだよ」ジャンクは少し疲れているみたいだ。

私はどこか知らぬところを歩いていると、回廊が見えて、歩き続けていた。

L型の回廊が現れた。手前の廊下を両足を切断された女が身をくねらせ、這っていた。その女が向かう場所はL型の回廊の縦に伸びる何段あるか分からない、瓦を重ねたような長い階段であった。女はその階段の上り口まで来ると、深いため息をついた。階段の上は回廊の屋根で見えなかった。

階段へ私は女を乗せると、再び女は一段一段昇っていった。女に付き添うようにゆっくりと私は階段を上っていった。

上りつめると、急に視界が理科の実験室のようなところに変化した。中央には歯科医院で見かける寝椅子が置かれ、それと一体になってついている台には様々な形をした金属の器具がどんよりした光沢を持って置かれていた。寝椅子自体は剣道の面のような形の金属が、体を固定させるように備え付けられていた。これは小林が使用する拷問装置だと分かった。

その拷問台から離れた位置に黒板と教壇、それにピンクの学習机が見えた。それに向かい合うようにして、奥の壁際には小さなロッカーがあり、誰かが閉じ込められているようだった。そのため私はロッカーを開いた。中からシンゲンが出てきた。振り返ると、教壇の上に両手両足の切断された女が緊縄された状態で置かれていた。女は汗を顔に浮かべて、苦しみもがいていた。先ほどの回廊であった女とは違う女だった。顔は殴打され続けたようで、ひどく腫れていた。ここが小林の部屋であることは間違いなかった。

回廊で会った女が入口から顔をのぞかせた。おそらく小林に、私が実験室に入り込んだことを告げ口したのだろう。回廊が騒がしくなった。手術用手袋が入口のドアを開けようとして目に入った。

私は急いでキャップをかぶり、地面に潜った。

実験室に小林が入った。告げ口をした、這う女が下から小林を窺って、「確かに見ました」というが、小林は大変不機嫌になり、地面を這って逃げる女をつかまえ、上に持ち上げ、床に叩きつけた。女は小便を漏らし失神してしまった。苛立ちのため息を小林がつくと、今度は教壇に乗せてある女の顔を何度も何度も殴りつけた。そしてそれが済むと、実験室から出て、妻を視姦しに妻の部屋に入っていった。実験室内に電話のベルが響いていた。

一方ジャンクはその頃治安取締局に追われていた。黒く塗装された杉板で組み立てられた電車の中をジャンクは走り続けて、距離をとったときに車窓から電車のかまぼこ型の屋根に這い上がり、その不安定な列車の屋根をジャンプしたり、走ったりして逃げ続けるのだが、治安取締局の連中のほうが不安定な足元に慣れているらしく、すぐに距離が縮まってしまった。ジャンクが必死に逃げるだけ距離はますます縮まった。そしてジャンクの襟首を取締局の男がつかむと、ジャンクの体を数人の男が押さえつけた。一人はジャンクのコメカミに膝を押し付け首を固定し、もう一人はみぞおちに膝を押し付け、もう一人はジャンクが固定され動けなくなったのを見計らって、足首に結束チューブを巻きつけた。男たちは息を切らし、汗で濡れているジャンクとはちがい、風呂上りのような顔つきをし、皆仮面のように表情が消えていた。脳信号で連絡すると、何分もたたないうちに空中警察が動き続ける列車上空に現れた。

取締局がジャンクの身柄を小林の教育施設に送るように空中警察に静かに告げた。猛禽類が野鼠をさらうようにして、ジャンクは運ばれていった。小林が詳細にジャンクを取り調べ、再教育を行うまでの段取りをした

取締局の連中は屋根から車窓に滑り込み、席に今のことをまったく意に返さないような顔つきで行儀よく腰掛けていた。列車はもうレールの上を走っていなかった。列車の先には竹林が迫っていた。その竹林に列車は突っ込み、横転し、腹を出したとき、列車から彼らは一人、一人出てきて、どこかに消えた。

ジャンクが拷問台に固定された。

回廊を小林が便所サンダルでゆっくり歩く音が近づいた。小林は入口に入るときに、ウェルパスで手を消毒して、ゴム手袋をはめ、握り拳を作ったり、指を組み合わせたたりして、手に手袋をなじませた。

ジャンクはすでに体が震えだし、顔には汗がたっぷり浮かび、首筋を濡らしていた。小林は教壇の上の肉の置物の具合を調べ、そして拷問台に固定されたジャンクに近づいた。ジャンクは目を閉じるが、瞼が震えた。

「瞼の無い女っているのを知っているか？」小林は若干高めの声でジャンクに呼びかけた。ジャンクは首を振った。

「あれはたいそうキツイらしい。夢を見ることができないそうだ。生まれつき目の見えないやつは夢を見ないそうだ。瞼の無いものはヒアルロン酸で常に目を保護しなくてはならない」

小林はひとつの金属器具をつまみあげ、ジャンクに見るように言った。ジャンクは目を閉じたままだった。

「目は心を忠実に表す器官のひとつだ。私は君が“感じている”のか知りたいのだ。君の心を見たいのだ」

突然小林はジャンクを覆っている額を固定する金属製の固定具を持ち上げ、はずすと、何かにとりつかれたかのように、執拗にジャンクを殴り続けた。小林のバックハンドブローで、涙と、鼻血が出た。「おまえは人を教育することがどんなに大変かを知っているか？教育とは一種の洗脳なのだよ。私は生物の教師だ。生命の神秘を知るには生物などという学問の枠で括るのでは狭すぎる。生命というものはそんなに簡単に了解できるものではないのだよ。」

ジャンクの顔はしばらくすると、夏に収穫し忘れた膨らんだナスのようになった。それを見た小林は再びジャンクを固定した。

「私は教師だ。この世界の秩序を乱すものを再教育する役目を負っている。」

もうジャンクの唇は腫れ、歯は折れ、しゃべることができず、口の中の出血のため、喉に血だまりができ、彼が唯一できることといえば、気管の本能的な反射運動で血のあぶくを口から出すことだけだった。

「さ、瞼を取って、心を見よう」

実験室は悲鳴すら上げられないジャンクを、小林が事務的な手際で処理しだした。床にサンダルが軋む音とジャンクがもがく固定具に体が当たる音しかなかった。

再教育の完了した小林は「のんびり和尚」を見るため、学習機に向かった。

ノンノン様は家庭教師をしているらしいので、家庭教師を探していた。どうやら側溝に跨る細いコンクリートの枠を渡り向いの家に入ることらしい。家の門扉には錆びついた看板が掲げてあり、「英語塾 きめ細やかな指導を実践します」とあり、診療所の赤いランプが軒についていた。ガラス戸をあけると、すぐ階段だった。下駄があり、上に上っていった。狭い畳敷きの部屋にノンノン様がいた。

「引っ越したのですか？」

「ジャンクは濫用したね、危ないよ。どうやら捕まったようだよ。」

「捕まったって、取り戻せるでしょうに。」

「今回は無理よ」

「前もそうだった、ユキの時もだ！今度はジャンクも諦めると言うのですか！」

「掟。この世界の掟なのよ。夢の世界を破壊することはできない。小林の役割は夢の世界を維持すること。モグラの兵隊はその夢の世界を破壊しようと映る、奴らにはね、だから狙われるんだよ、あの子には、きちんと注意した、帽子を濫用するな、と。濫用したら、目をつけられる。あたりまえのこと。約束事。場面を変化させる働きがあの子の帽子にはある。潜ることはその光景からの脱出。でも、夢の世界からの脱出ではないの。いずれあの子は帽子を取られてしまう。ユキさんと同じくこの世界にいつづけることになる。もし、小林に殺されたとしたら、あの子はこの世界でもこの世界の外でも存在を失う。消失してしまうんだ。跡形もなく。」

「ただ、手をこまねいて見ているというんですか」

「仕組みよ」

「夢から覚めるにはどうしたら？」

「あなたは何も知らない、あなたもこの世界に入り込みすぎたのよ。夢は不思議なもの、でも危険なの。夢から覚めないと人は死んだも同じ。」

「夢から覚めるには！」

「階層だって言ったでしょ。深く入り込みすぎたのよ、あなたは！夢が覚めるのは階層を何層も越えていくことになるでしょう。夢の中で夢を見て、その夢の中で夢を見る。夢が論理をもったらどうなる？それこそ夢の世界の破壊でしょ！モグラの兵隊がやってきたことはこの階層を何層も跨いだことなの！夢の番人は怒ることでしょう。人の共有地への侵略者。分かってちょうだい。」

第1部終了する。